

報道と人権

平成二十年度 全国中学生人権作文コンテスト 姫路地区予選 優秀賞受賞作品



淳心学院中学校 二年 南 北川暉二

(南 加寿子さんの孫)

この前、「松本サリン事件」の被害者である河野さんの妻が亡くなられたというニュースをテレビで見ました。

「松本サリン事件」と言うのは、1994年、長野県松本市で起こったテロ事件です。住宅街に猛毒の神経ガスであるサリンが撒かれて、七人が死亡、六六〇人が負傷したという悲惨な事件です。後になってオウム真理教が真犯人であると判明したのですが、警察のいかげんな操作や取り調べ、そして、偏った報道によって、無実の河野さんが犯人として扱われてしまった「報道被害事件」として知られています。とくにマスコミは、まるで河野さんが真犯人であると思わせるような報道をつづけました。またある週刊誌は、河野家の家系図まで掲載してプライバシーを侵害するということがありました。

僕はこの事件が起こってから四ヶ月後に生まれました。ということは、僕が今まで生きてきたと同じ十四年もの間、この事件によって苦しんでいた人がいたということになります。

サリンによって寝たきりになっておられた河野さんの妻は、一四年目の今年の夏、一度も意識を回復することなく死んでいったのです。事件によって被害を受け、妻が意識不明になっているのに、日本中に「犯人は河野」と報道されてしまった河野さんの心はどうだったでしょうか。被害を受けているのに、自分ではどうしようもない大きな力をもったマスコミのせいで涙を流す人がいることに怒りを感じます。

また、この事件だけでなく、最近はいやな

恐ろしい事件が沢山起こっています。そのたびに、一部のマスコミは、報道する必要のないようなことまで大袈裟に報道している。身近な例をあげると、僕は加古川市に住んでいますが、去年の秋に近所で幼い女の子が殺されるという恐ろしい事件が起きました。まだ犯人は捕まらないうままです。事件後しばらくはテレビで毎日報道していました。ヘリコプターは飛び回るし、マスコミの人が聞き込みに来るし大変でした。その報道の内容のなかには、被害者の家庭の事情をいろいろと調べたものもありました。そんなことよりも早く犯人をつかまえてほしいというのが僕たちの気持ちでした。被害者の家族はつらい思いをしているはずなのに、さらにひどい目にあわせていると思いました。

(五行省略)

テレビや雑誌などのマスコミは大勢の人が見たり聞いたりして、大事な役割を果たしています。たいていの人は、テレビが言っているから本当だ、雑誌に書いてあるから本当だと思ってしまうし、それは仕方ないことだと思えます。だから、責任をもって本当に大切な事だけを報道するべきだと思います。

また、最近ではマスコミだけでなく、カメラつきの携帯電話をみんな持っていて、なにか事件にでくわしたらチャンスというふうな思っで写真を撮ろうとする心ない人も大勢います。でもそれは人権侵害になる場合があると思えます。

秋葉原でひどい事件がありました。その時も、関係のない人達が、携帯電話のカメラで現場写真を撮っていたそうです。僕はそのことを聞いてとてもびっくりしました。また、何カ月か前に、僕が学校から姫路駅まで帰る途中、交通事故がありました。その時、それを写真に撮ろうとした他の高校の人と、「そんなことをするな」と注意した淳心の先輩との間でちょっと喧嘩のようになつた事がありました。

携帯電話を通して、自分の知らない大勢の人がその画像を見ることが出来ます。この交通事故を起こした人も、事故のことなど他の人に知られたくないと思っっているはずですが、それなのに、写真を撮ったその高校生はよくないと思えます。一方、それを注意した淳心生は立派だと思いました。

今、私たちの身のまわりに、マスコミなどの情報があふれています。そして、誰もが情報源となる携帯電話やパソコンを利用してきます。

こういう状況のなかで、人権を守ることは難しくなっています。でも、難しいからマスコミの人も僕たちも、(より一層相手の気持ち相手の立場を思いやり、人権侵害にならないよう)十分気をつけなければいけない時代になっているのだと思います。



Table with 4 columns: 地区名, 代議委員, 仏仕, 仏婦. Lists names of representatives and staff members across various districts.

二月 如月のこよみ

- 一日 仏教社壮年会総会
五日 朗読ボランティアアスナロ(編)
十一日 仏教婦人会評議員会
十五日 湯口千代さま忌明法事
二十一日 沢田貞彦氏宅法事
二十三日 清水儀一氏宅法事
二十五日 藤山克巳氏宅法事
二十六日 みのりを聞く



勝林寺報

親鸞の生涯 30



苦難の晩年

二十年の関東伝道を終えて、京都に帰った親鸞であったが、京都にも、また関東からも、あらたな苦難の嵐が親鸞を襲ってまいりました。

鎌倉幕府は、親鸞が残した関東の念佛集団を警戒し、「神仏習合」(日本在来の神々と仏教の仏菩薩は一体)を唱える権力者や古い仏教徒と手を組んで、念佛停止の訴訟を起こしました。(建長の弾圧)その訴えの要点は①親鸞の念佛仏宗は、弥陀一仏にすぎり、他の神仏を排除し尊崇しない。日本古来の伝統宗教に敵対する邪教である。②日本の国は「神の国」。神である天皇のために祈り、国を鎮護するため尽くすのが宗教の使命。にも拘わらず、親鸞の念佛宗はこれを否定する。反天皇・反権力の邪教である。

この幕府の告発に対し、一関東一円の念佛者たちは、性信という人を先頭に立て(京都の親鸞の指示を仰ぎながら)この裁判闘争に勝ち抜きました。

しかしながら、関東には、また再び、他から、非難排斥されかねない困った風潮や動向があったことも否定できませんでした。

其のことが、親鸞にとって深い懊悩の種でありました。いくつか挙げると、

①悪人めあての「本願に甘え、「本願ばかり」とか造悪無碍(ソツソツ) (どんな悪行をしようともお救いまちがいなし)」と言って、思いのままの振る舞いをする誤った考え。②(当時流行の)鎮西派などの教学に対抗するため、真宗独自の教学質問を立て、それをもって真宗念仏を説き示そうとする風潮。(信心は有念か無念か。来迎往生か即得往生か。一念か多念か等)。③念佛宗を民衆に広めるためには、古来からの淫祀邪教と手合わせ、自らも祈禱などをとする人達。また自分の家柄や血筋を売り物にしてその権威で布教しようとする人もいた。

こうした関東の弟子たちの間の深刻な問題を、こころある弟子たちは、京都の親鸞に逐一報告し、その裁断を仰いだのは当然でした。十余ヶ国の国境を越えて、命をかけて直接京都に上ってきた人もいました。また、手紙で逐一報告し、その判断を親鸞にもとめてくる弟子もいました。親鸞はその一々に、懇切丁寧に、面談し、また返事を書きました。現在確認されている親鸞の手紙(およびその断片)は四十三通(うち真筆十一通)。そこには混乱状態に悩む弟子たちに対し親身に向き合い、悲しみ悩みを共にしながら、共に如来さまの真実に触れていこうとする親鸞晩年の苦悩の姿がはっきり浮かび上がります。

葬儀 榎見 千代 さま 八十八歳 湯湯口 一月一日

京都に帰ってからの親鸞は、日々多忙でありました。『顕浄土真実教行証文類』六巻を仕上げること、渾身の力を傾注していました。法然上人の真実を何としても世間に顕さなければなりません。

それに、法然門下の先輩たちが朝廷の念佛弾圧によって京都から追放されたり亡くなったりの今、月々のその追悼念佛法会の導師も勤めなければなりません。そしてその機に、先輩隆寛律師・聖覚法印などの著書にいていねいな解説を施し、それを広く配布して法然さまの選択本願念佛のおしえを広める努力もしました。その多忙な中の、関東の弟子たちとのカウセリング。

関東情勢の深刻さを、多忙な親鸞は、胸ひきさかれる思いで聞き、そして、老いの目をしばたかせながら、筆をとったことでしょう。

なかでも老いの身に、抜くことのできない衝撃を与えた悲惨な出来事は、親鸞八十四歳のときにおこった子息並口鸞の義我始紀(勘当)事件でありました。(詳細は次号で)

1月26日(水) 名まえ(さいとうえりか) はっけんしたもの(しんらんさんのじやう)

平成二十一年 2009年の行事 (二月一七日代議員会承認)

- 三月 二十日 彼岸会・合同役員会 二十八日 出石組内会 二十九日 出石組「花祭り」 四月 五日 出石組組会 十一日 観桜会 五月 十四・五日 念仏奉仕団 二十三・四日 宗祖降誕会 六月 十三・四日 納骨参拝研修旅行 七月 四日 おみがき奉仕作業 八・九日 永代経 九日 仏婦総会 八月 一日~十日 若院盆参り 八日 戦没者追悼盂蘭盆会法要 十一~十三日 出石盆参 十九日 勝林寺子供会 九月 二十三日 秋彼岸会・合同役員会 十月 九日 敬老報恩講 十一月 十四日 おみがき奉仕作業 二十一・二日 報恩講 二十四日以降翌年一月まで家庭報恩講 毎月二十六日 みのりを聞く会 毎月一日「勝林寺寺報」発行

